

(様式 2)

「秋田大学学生海外短期研修支援事業」実施報告書（引率者用）

平成 24 年 12 月 4 日

所属・職名：秋田大学国際交流センター・准教授

氏名：牲川 波都季

研修期間：平成 24 年 9 月 3 日～平成 24 年 9 月 30 日

研修先：英文 University of Victoria, English Language Center

：和文 ビクトリア大学 英語学習センター

○研修成果

当初の研修目的とそれに対する成果を以下に記す。

英語力向上：

① 3 レベルの能力別クラスがあり、適切なレベルの授業を受講することができる。

→今回、実際に研修に参加した学生からは 5 レベルあったという報告を受けた。残念ながら、今回の研修参加学生は、本学学生以外もほとんどが日本人であり、その点では昨年度のように、英語のさまざまなバリエーションを知る機会にはならなかったようである。しかし、他大学からの日本人学生が英語学習や留学に強い動機をもっており、そのことで本学の参加学生も大きな刺激を受けたということであった。

② 秋田大学の学習環境では向上の難しい、話すこと・聞くことを中心としたクラスである。

③ 月曜日から木曜日までの、毎日 5 時間の集中授業である。

→少人数クラスであり、テーマに対する議論、クラス外でのインタビューを含んだプロジェクトワークなど、英語を用いる活動が積極的に取り入れられていたとのことである。これにより、特に話すこと・聞くこと的能力が上がっただけでなく、英語教育に興味を持つ学生にとっては授業方法についても新たな知識が得られた。

④ 期間中すべてにわたるホームステイにより、英語使用の機会を十分に提供できる。

→英語研修は、本学学生も含めほとんどが日本人であったが、ホームステイで授業以外は英語を使う環境が十分にあった。

カナダ文化についての知識獲得：

① 毎金曜日に社会文化活動が行われる。

② 研修期間中、ホームステイでカナダの実際の生活を体験できる。

③ その他、オプションで多種多様なアクティビティーに参加できる。

→ホームステイ先がインド系移民の場合もあり、ファミリーと一緒に宗教行事に参加するなどして、多民族国家カナダの実状を垣間見ることができたのではないかと考えられる。また大学

(様式2)

によるアクティビティにも参加し、バンクーバー島の観光資源にも触れることができた。一方で、1ヶ月の経験がカナダ全体の文化的特徴を知るために十分であったとは言えない。カナダと一口に言っても広大であり、参加学生には自分自身の経験と出会いを安易に一般化することなく、個別経験として十分にその意味を振り返ってほしいと考えている。

○研修期間全般にわたる感想

国際交流センターとしてのビクトリア大学英語学習センターでの研修は昨年度より開始したが、今年も、T&D ビクトリアサポートセンターの林大輔氏の多大な支援を得て、準備、研修を無事終えることができた。またホームステイ先も、昨年同様学生を受け入れた経験豊富な家庭であり、参加者は過度な緊張やストレスにさらされることなく毎日を充実して送ったようだ。

10月に2回、11月に報告会も含めた2回の事後研修を実施した。報告書や、研修前・後に受けたTOEFL-ITPの結果から、各参加学生には以下のような学びがあったとされる。

	報告会でのテーマ	学習成果
佐藤 華奈	文化	英語に関しては、聴解能力が特に伸長した。ホームステイ先が移民の家庭であり、多文化・多民族国家としてのカナダが理解できたと考えられる。英語学習と留学の意義をさらに考えたうえで、長期留学につなげてほしい。
柴田 朱里	ホームステイ	英語は全技能での著しい向上が見られた。ホストファミリーと過ごす時間が長かったようで、自ら積極的に働きかける意志と自信を身に付けた。自分がどこで何をしたいのかを見極めて長期留学の準備を進めてほしい。
磯谷 匠	英語の授業	英語は特に文法と書きことばの面で伸長があった。英語教育に興味をもっており、ビクトリア大学でも自ら英語を学ぶだけでなく授業の特徴と利点をよく観察していた。他の場所との比較など、英語教育の専門化が期待できる。
佐藤 晶子	出会い	英語は全技能での著しい向上が見られた。初の海外留学で人々に温かく受容されたことが印象に残ったようである。今後は自分から働きかけるための表現能力を獲得して、自分の専門を生かす留学先を考えてほしい。
酒井 亮	スポーツ	英語は全技能で一定の向上が見られた。4年生で就職前の最後の機会ということで、ビクトリアの人々からワーク・ライフ・バランスの多様な可能性を認識したと思われる。将来は海外駐在の可能性もあり、経験を生かしてほしい。

(様式 2)

英語面だけでなく、それぞれの目的に即した学びがあったと考えられる。次年度以降は、教養基礎教育の単位取得科目とすることも検討中であり、学生それぞれの将来に生かすことのできるプログラムとしてさらに充実を図りたい。

なお本事業では、英語力向上面での事前サポートを教育推進総合センターの濱田陽助教から得た。牲川は主に事後研修を担当し、国際課の正木が手続きや林氏を通じてのビクトリア大学との連絡を担当した。